



[令和 2 年 7 月 8 日 定例会報告]

## 三つのテーマに分かれて懇談

「新型コロナウイルス」の感染拡大の影響で、手稲郷土史研究会の定例会も 4 月以降“開催自粛”を余儀なくされてきましたが、ようやく再開となりました。今回は趣向を変え、飲食を伴わない茶話会と称して三つのテーマに分かれて和やかに懇談。“健在ぶり”を互いに確認し合いました。

### 【テーマ 1】 馬と手稲

手稲は 明治の初めに通行屋が設けられて 交通の要所として発展した経緯があり、馬車の往来も多かったと思われます。馬喰を生業とする者や家畜商の協同組合もあったそうです。また、「馬頭観音」も祀られ、農業が盛んだった頃は馬が手稲の人々にとくに大切にされていたことがうかがえます。「馬鉄」が走っていたことも忘れてなりません。次のような話題が提供されました。



昭和 30 年頃の手稲の風景  
—『手稲で見つけた手稲のはなし』より—  
(2000 年・手稲区発行)

●自宅で家畜として 2 頭飼っていたが、とても賢い生き物だった。●戦時中、我が家では 陸軍からの要請で 5～10 頭の馬を預かり飼育していた。農耕馬は昭和 40 年くらいまでか。●馬は利口。家でも農耕馬として 3 頭飼育していた。昭和 14、15 年には本間農場で軍馬の育成を行ったと聞く。●昭和 15 年頃にサラブレッドに騎乗した。たてがみを撫でた感触を憶えている。●伝説の「ハイセイコー」を見に行った。

このほか、一ノ宮 相談役が持参された蹄鉄や、北海道開拓記念館の「HORSE～北海道の馬文化」展（平成 18 年）の資料なども回覧しながら、絵馬のこと、馬具屋のこと、ばん馬競争のこと、牧草地のこと、はては日本の馬の改良についてと、話は尽きませんでした。 [進行:濱埜/報告:中島]

### 【テーマ 2】 郷土史研究会を楽しいものにする方法

何とも漠然としたテーマでしたが、予定時間が足りなくなるほどに盛り上がりました。

●札幌の地名の由来となったところなどを 史資料をもとに訪ねたい。●コロナ時代は室内ではなく屋外の活動を！ まずは手稲の歴史遺産を 車に分乗するなどして見て歩く。アイヌ語地名を訪ねて痕跡を探すのも面白い。「光風館」など今は無き建物の跡も巡りたい。「手稲鉱山」の残土からテルル鉱を見つけ出すというのもあり？ ●研究会の分科会（石の会、新川など）の活動をもっと充実させてはどうか。誰もが気軽に関われるよう情報発信するとか。●座学だけでなく フィールドワークの機会が多いとやはり楽しい。研究発表も質疑応答の時間をもっと取るなど双方向の工夫を！ グループで話し合う機会を持つとコミュニケーションも深まるのではないかな。



会をもっと楽しくするには…？

●教育現場との交流も重要。子どもたちの手稲に対するイメージや知識について知りたい。可能なら 小学校の郷土史の授業を参観したい。民話や伝承、郷土芸能の採集も大事な取り組みだと思う。●手稲の歴史だけにこだわらず 札幌や北海道全体の研究があってもよいのではないかな？ 区役所の「手稲歴史資料展示コーナー」を協力し合って充実させよう！…etc.

貴重なご意見をありがとうございます。 [進行・報告:乙黒]

### 【テーマ3】『ゴールデンカムイ』と手稲

『ゴールデンカムイ』は、野田サトルが2015年から連載し、現在も続いている大人気漫画です。難波日登志 監督によってアニメ化され、今秋にはテレビ放映も予定されているとか。内容としては、日露戦争の元兵士 杉元佐一がかつてゴールドラッシュに沸いた北海道へ渡り、一獲千金のサバイバルを繰り広げるといったもの。アイヌが隠した莫大な埋蔵金の在りかが 網走監獄の囚人 24名の背中へ パズルのように刺青され、脱獄後に小樽への集合が命じられるなど手に汗握る展開に私は魅了されたのですが、この漫画について知っていたのは、



『ゴールデンカムイ』第1巻  
(2015年・集英社発行)



アイヌの少女 アシリパ  
(集英社 HP)

残念ながら参加した会員のうち3名だけでした。

この漫画がなぜ手稲と関係があるのかというと、物語の冒頭で描かれる 杉元が砂金を取る場面は、「星置川」がモデルと思われるからです。また、あくまで私見ですが、もう一人の主人公である 勇敢なアイヌの少女 アシリパが狩猟で活躍する場所は、たぶん「手稲山」に違いないと…。これは、アシリパのピンチのときに現れては彼女を救う 白い狼の存在が、手稲山に昔は狼がたくさんいたという伝聞とも重なります。

参加者からは 以下の話題が出ました。●このような漫画があったことは全く知らなかった。ぜひとも読むなり DVD を借りて見るなりしてみたい。●手稲には「テイネ・イ」をはじめアイヌ語由来の地名が多い。手稲とアイヌの結びつきを、若者に知ってもらう良い機会かもしれない。●今年は『ウボポイ』のオープンもある。アイヌ民族の歴史や文化をもっと学びたい。●北海道開拓の村では『ゴールデンカムイ』に登場する建物のマップを作成したり、コスプレ撮影に協力したりしている。小樽市総合博物館でも企画展を開催し、その後の「聖地巡礼スタンプラリー」もにぎわった。漫画の影響か アイヌ料理を提供する店が札幌も増えている。まちづくりの観点からも注目すべき作品だ。●直木賞受賞の『熱源』(川越宗一)は、『ゴールデンカムイ』と時代設定が同じと聞く。ぜひ読み比べたい。●若者人気にあやかり、「アシリパの里・手稲」としてアピールしてはどうか。

『ゴールデンカムイ』の読後感や鑑賞談などを ぜひお聞かせ願います。 [進行・報告: 沖田]

次回定例会 ⇒ 発表内容「手稲鉦山を拓いた人々—その光と影—」／鈴木清士(手稲郷土史研究会 会員)  
9月9日(水) 18:15～／手稲区民センター3階 視聴覚室／会員でない方の聴講は申し込みが必要

### 日帰り研修ツアーへのお誘い

当研究会恒例のバス旅行—今年とはなりまち 当別町 を訪ねます。どうぞご参加ください。

- 実施日 … 9月25日(金) 9:00～16:00 「手稲区民センター」前集合・解散
- 見学先 … 当別伊達記念館・伊達邸別館・当別神社・旧弁華別小学校・道民の森 ほか  
※今後の新型コロナウイルスの感染動向により、実施の有無を含め、見学先は変更になる場合があります。ご承知おきください。
- 参加費 … 2,000円(昼食費・バス代金・資料代等)
- 定員 … 30名(先着順)
- 申込み … 手稲郷土史研究会定例会で回覧の「申込書」に記入、もしくは研究部: 沖田部長まで、氏名・住所・連絡先を添えてお申し込みください。
- その他 … マスク着用、飲み物持参のこと。発熱など体調がすぐれない場合は参加を見合わせましょう。



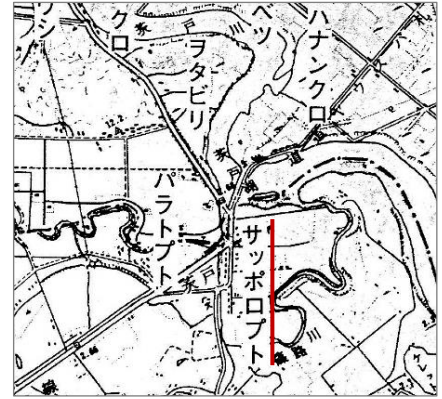
伊達邸別館 (当別町観光協会 HP)

## 【つれづれ随想】

## 石狩のアイヌ語地名

7月の手稲郷土史研究会の例会で、アイヌ語地名の権威が「札幌の発祥の地は石狩です」と言ったのでとても驚いた。帰宅してからアイヌ語付記の地図を見れば、確かに石狩市から東茨戸にかけての地域に「サッポロプト」と記載されている。だとしたら札幌は東茨戸の地名が今の大都市全体の地名になったことになり、東茨戸に幾らかゆかりのある私は不思議な気がした。

東茨戸は、私が大好きなオタベリヶ丘や茨戸川に近く、将来住むつもりで父の土地を譲り受けたところだったが、水害の恐れがあるから住むなと助言されて住まいは花川に変え、東茨戸には治水が良くなってから父がアパートを建てた経緯がある。



地図に付された「サッポロプト」

地図を見ていると、他にも興味深い記述を次々に見つけた。両親が農業をしていた樽川村西8線には「フンベコイ」の地名がある。私は十線浜が昔「分部越」と呼ばれていたことは知っていたが、そこには「フンベオマイ」と書かれている。新川河口にあるオタネ浜は「オタナイ」（ヲタルナイ）とあり、小樽の発祥の地であることが判る。その場所は今は小樽に編入されてしまったが、元は石狩市の一部だったので、石狩市は札幌と小樽の生みの親ということになる。二人の子供は立派に成長したが、肝心の石狩は今一つ伸び悩んでいる。

私が今住んで居る辺りには、「シリサム」と書かれている。確かに冬は尻が寒くて困ることもあるが、この地名は初めて見た。ネットで調べると、シリは島、峰、土地、天候、様子、図体を表すが、サムは該当するものがない。シリアスサムの間違いではないかと聞いてくる。すぐ南側の市境には発寒川が流れているので、発寒と関連していると思われ、発寒の語源を調べると、地名の由来は諸説あるが、桜鳥（ムクドリ）が群生していたことから、アイヌ語の「ハチャム・ペツ」（桜鳥・川の意）からとられたものとするのが通説であると書かれていた。これらを総合的に考えると「シリサム」は桜鳥の多い川のそばの土地となり、当たり前すぎて面白くないが、地名なんて大方そんな決め方をされてきたのではないだろうか。

更に花川北を茨戸川に沿って見ると、石狩市役所付近に「パナクルヤソツケ」、「ハナクル」、「トウヤウシ」などの地名が見られる。前二者は花畔の語源としておなじみだが、「トウヤウシ」は似たような地名があるものの意味は不明。茨戸の西側の緑苑台には、「ヲタペリ」、「パラトプト」などの興味深い地名が並んでいる。生振には、「オヤフル」の他、「フシコベツ」、「ウツナイ」、「ヒラカヤウシ」、「トリアシ」、「マクンベツ」などがある。「オヤフル」の意味は他の丘とする説や、尻が陸地についている丘とする説がある。更に石狩川が大きく回っていて袋のように包まれた姿の土地、つまり根もとのくびれたようなところを呼んだ名であるとする説もある。「フシコベツ」は古い川の意味で、現在も伏古の地名として残っている。札幌川（豊平川）は、元は現在の豊平橋のあたりから北流し、今の茨戸の東側で旧石狩川に注いでいたが、後に洪水で河道が変わり、東側のツイシカリ川の古い札幌川筋に流れ込んで東北流したのだという。それから元来の伏古地区札幌川下流は急に小川となり、そこが「フコ・サッポロ」（古い・札幌川）、あるいは簡単に「フコ・ペツ」で呼ばれるようになったとある。「ウツナイ」は背骨に対する肋骨のように、本流に対して直角に流れ込む川の意らしい。また「ヒラカヤウシ」は意味がはっきりしないが、川沿いの長崖の終わるところという意味の平岸と関係がありそう。「トリアシ」も意味は判らないが、「マクンベツ」は後にある川の意味で十勝の幕別と同じだが、石狩市内でもそのままの地名が残っている。

こうして調べていくと興味が尽きないが、どの地名もアイヌの方々が覚えやすいように地形を基にしたものが多いようだ。

釣本峰雄（手稲郷土史研究会 会員）

## ◆ なつかし写真帖

## 「乙黒製油所」と…私



昭和20年代撮影 乙黒製油所の門柱と煙突

私が生まれ育ったのは、『乙黒製油所』の正門前にある社宅でした（現在の富丘2条6丁目）。玄関前にはブランコを設えたスモモの木があり、家の裏は梅園。畑で野菜を作り、牧草を食む家畜の姿も見えました。子どもが遊ぶには最適の地で、三樽別川や乙黒さんの池で水遊びをしたことも懐かしい思い出です。

私の祖母「キセ」と「乙黒キクセお婆様」（三代目 乙黒定七氏の母）とは、ともに明治10年代に生まれた姉妹（キセが姉）で、出掛けるときはいつも一緒。お寺参りには私もよく連れて行かれ、あの静寂感は今も好きです。姉妹の性格は気丈でよかったのですが、気遣いができ、立派だと感じていました。信仰心の厚かったキセは遺言で寺に寄付を行い、現在、富丘の『妙行寺』となっています。

私が小4の頃に自宅は移りましたが、父が三交代制で製油所に勤めていたため、祖母の作った弁当を届けによく工場に行ったものです。菜種を搾る香りが好きでした。しかし、時代とともに油を搾ることも少なくなっていき、学年が上がると私も工場へ行く機会はなくなりました。親も知人も関係の皆さんも世代交代されて、もうはるか昔のこととなってしまいました。

横浜に長く暮らした私は、2014年に札幌へ戻って来ました。今も残る『乙黒製油所』時代の門柱の前を通るたびに、懐かしさが甦ります。

中島千恵子（手稲郷土史研究会 会員）

## 遺構・遺物は語る

### 街の中の小さな馬頭観音像

写真の石碑は、手稲駅の南側の商店街の一隅にある小さな「馬頭観世音」だ。人々が引っ切り無しに通る足元に、ひっそりと佇んでいる（手稲本町2条2丁目）。

手稲区内には馬頭観音や牛馬供養碑がいくつかあるが、このような小さなというか可愛らしい観音像は珍しい。ここと地続きの老舗の銭湯「藤の湯」は、古くは温泉宿を営み、牧場も持っていた。その頃からすでにあつたという馬頭観音は、生活のうえで貴重な役割を果たしていた愛馬を偲び、忘れないようにという願いを込めて建てられたものと思われる。

手稲においては戦後の高度経済成長時代に入るまで、農家にとって馬は欠かせないものであった。少なくともどの農家にも最低1頭はいたし、ときには仔馬を含むと2頭、3頭ほどは飼われていた。また、この馬の飼育全盛時代には、蹄鉄屋、馬具屋、馬宿、博労（馬喰）などと呼ばれた馬関連の商売をする人々もかなりいた。

こうしたなか、特筆すべきことは、戦前に、手稲から石狩花畔までの区間を馬鉄（軽石軌道）が走っていたことだ。花嫁としてこの馬鉄に乗って来たという女性もいたようだが、いずれにせよ農家の人はもちろん、街の人々にとっても馬は非常に身近な動物で、いつも愛着を感じていたようだ。そうした思いを観音像として残し、いつまでもその恩義を忘れないようにとしたのだろう。

人々に今や忘れられたようにひっそりと佇むこの小さな「馬頭観世音」を見逃さず、是非、ご覧願いたい。

村元健治（手稲郷土史研究会 会員）



手稲本町の「馬頭観世音」